

284. 平成10年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その3）

20. 横穴式石室を主体とする2基の円墳の調査 伊吹町上野 人塚遺跡

伊吹山南麓で、伊吹町上野の東の水田中に位置する人塚遺跡は、縄文時代の遺物散布地として周知されており、石棺が表採されている。水田中には人塚・ミミ塚と呼称される大きな石灰岩の露出している部分があり、平成9年度に伊吹町教委により実施された試掘調査では、周溝とおもわれる遺構が検出された。なお、今回の調査は中山間地域総合整備事業伊吹山南麓地区工事に伴うもので、調査面積は約2,106㎡である。調査では、人塚・ミミ塚と呼称される部分が共に横穴式石室（石材は石灰岩）を主体とし、周溝をもつ径約15m程の円墳であることが確認された。墳丘はほぼ完全に削平されており、盛土は殆ど確認されていない。

人塚古墳は開壘時に石室開口部が大きく削平されており、現存で玄室長約2.7m、幅約1.7～1.8m、高さ約1.7mが確認されたのみである。しかし、床面には約10～20cm程の河原石を用いた敷石があり、副葬品として鉄鎌7点と大量の須恵器（杯身・杯蓋・有蓋高杯・碗・提瓶・広口壺・甕など）などが出土していることから、現存部は盗掘されていないものとおもわれる。石室中



人塚古墳遺物出土状況

央部に須恵器などを寄せて片付けた痕跡が認められることから、少なくとも1回以上の追葬が行なわれたものとみられる。また、火を受けた人骨片も出土しており、付近には焼土も確認されている。

ミミ塚古墳は人塚古墳に比して残存状況は良好で、羨道の一部が削平を受けるのみである。無袖式横穴式石室で、玄室長約5m、幅約1.5～1.8m、高さは現存約1.8mで、羨道は約2mが残存していた。敷石などの施設はなく地山を床面としているが、玄門部には仕切石が確認された。副葬品には、鉄鎌1点、鉄刀2本（鐔付きと鹿角の柄付き）、金銅製耳環2点と須恵器（高杯・杯身）、土師器（台付壺・鉢・甕・甗）などがあるが、須恵器よりも土師器の出土量がかなり多い。玄室内は玄門部から約2/3程が盗掘を受けている模様で、現在までのところ追葬の有無は確認できていない。また、人骨片の出土もあるが、火を受けた痕跡はない。

両古墳とも6C後半から7C前半の時期で捉えられるものとおもわれるが、副葬品の内容が異なることなどから、その関係が注目される。

（財滋賀県文化財保護協会 稲葉隆宣）

21. 天正地震の痕跡を検出

長浜市元浜町 長浜町遺跡

今回行った長浜町遺跡の調査は曳山博物館（仮称）建設に伴うもので、調査地は長浜市元浜町1101番地に所在する。長浜町遺跡は中世から現代に至る複合遺跡であり、平成8年に行われた第1次調査では下村藤右衛門邸宅跡、天正地震跡などが検出された。今回の調査はそれに続く第2次調査である。平成10年5月から調査を開始し、同年11月の下旬に現地調査を終了した。

調査の結果表土下約30センチメートルの深さから江戸時代後期から現代にかけての町屋敷、土蔵跡、下水溝跡、井戸跡、トイレ遺構、カマドなどが検出された。ここは大正時代ごろまで酒の醸造を行っていたといわれる藤井酒店があったところで、カマドは醸造に用いられた物と思われる。一基は煉瓦造りで、明治から大正にかけて使用されていたものと考えられる。もう一基は石組みによって作られており、江戸時代後期のものと考えられる。藤井酒店が江戸時代後期にはすでにこの場所で営業を行っていたことが明らかとなった。



(長浜町遺跡第2次) 調査区上層面遠景

また、この遺構面からさらに20から30センチメートル掘り下げたところから、第1次調査と同様に天正期の町屋跡と天正地震跡（1586年）が検出された。天正期の町屋跡を厚さ約30センチメートルの焼土層が覆っていた。町屋の礎石と焼土層は、間口より約20メートルまでであり、宅地割りの溝が約6メートル間隔であることから、町屋の規模は6×20メートルほどであったと考えられる。城下町のメインストリートである大手筋から少し外れているためか第1次調査で検出されたような大規模な礎石群は検出されなかった。また、第1次調査で検出された琵琶湖西岸地震（1662年）の痕跡も、今回は検出されなかった。

(長浜市教育委員会 池寄陽一)

22. 中世礎石建物跡を検出

長浜市宮前町 長浜町遺跡

今回の調査地は遺跡外であったが、長浜八幡宮の北に接し、「破堂」という字名が残ることから確認調査を実施することとなった。確認調査は平成9年度に実施され、その結果、近代製糸工場の基礎跡と近世以前の土器片が少量出土し整地層が確認された。調査地は現在病院施設および駐車場となっており、近代には近江製糸株式会社があった。配管も多く、かなりカク乱を受けていると考えられたが、遺構の一部が残存している可能性もあるため、工事立会調査を実施することとなった。

立会調査の結果、激しいカク乱を受けながらも花崗岩の礎石列が検出された。花崗岩の分布状況から3棟の礎石建物が明らかとなった。SB-1は、10.5mにわたって南北方向に礎石列が検出された。礎石列の西側は、カク乱が少なく整地層もよく残っていたが、礎石は検出されなかった。東側は激しくカク乱を受けていたが、掘方と考えられるピットと礎石の裏込めと思わ

れる花崗岩が検出されたことから、検出された礎石列は、建物の西側面と考えられる。SB-2は、南北14m、東西9mの範囲内で大小の花崗岩が検出された。規則性は不明瞭だが、礎石の間隔は2.5mと思われる。SB-3は、花崗岩の礎石が1基検出された。

3棟の配置は、SB-3が西端中央よりやや南に位置し、約22m東にSB-2が位置する。SB-1は、SB-2の北約27mに位置する。主軸は、条里と一致する。また、SB-1とSB-2は、西側面が一致することから、計画的に建てられたことが明らかである。室町時代にあった寺院が何らかの理由で廃墟となり、いつしか忘れさられたのであろう。

(長浜市教育委員会 丸山雄二)



(長浜町遺跡第3次) SB-1 検出状況

23. 縄文後期の住居跡よりヒト、イヌ足跡を検出 長浜市四ッ塚町 平方遺跡

平方遺跡は、平成10年に確認された新遺跡で、長浜市の中西部の四ッ塚町と平方町にまたがる範囲となっている。今回の調査は、平成9年度より継続の四ッ塚土地区画整理によるものである。これまでの調査では、近世水田跡、水路跡、竹樋、中世土壙等を検出しており、ほとんどの調査区が中・近世期の水田開発によって下層面の遺構面を破壊しているものと、近世水路内出土の弥生土器片、古式土器片から判断していた。

しかし、平方町との境に近い調査区では、近世水田跡より、まとめて縄文後期頃の土器が出土しはじめたので、下層には縄文時代の遺構の存在が予想された。

近世面より、人力により掘削したところ、11棟の住居跡と溝跡、土壙、ピットを検出した。住居内からは、縄文後期頃の土器・石器が出土しただけでなく、床面から、ヒトとイヌの足跡を検出した。本来ならば、床面は叩きしめられたり、床土をしっかりと敷くものであって、足跡は残らないはずである。もし、残るとすれば、床面叩きしめ、床土充填の際において、足で踏み

固めることが考えられるが、足跡より年齢を分析したところ、1、2、3才児のそれぞれの足跡が認められたので、作業に幼児が参加することは考えにくい。

また、イヌの足跡を7足分検出した。イヌの住居跡内の足跡検出例は、弥生時代に1例しかなく、縄文時代における家畜のあり方を考える上でも重要な発見と言えるだろう。これまで、縄文時代のイヌの埋葬敷設や、イヌの骨は出土しているものの、家畜としてどの様に飼われていたかは、謎であったが、今回の発見により、おそらくはヒトと共に住居内で生活していたことと考えてよいと思われる。

(長浜市教育委員会 西原雄大)



土壘に転用した礎石



3号住居跡のヒト・イヌ足跡

えられる。地元の人達は、露出した礎石のことを昔から『福の神』と称して崇め、触れると腹痛を起こすと信じてきた。この礎石と『福の神』のことは、東善寺跡に塔の台と称する礎石のことが書かれ、天満神社に『福の神』のことが、『改訂近江国坂田郡志』で述べられている。おそらく、この礎石は調査地とは隣り合わせである。また、調査地に天満神社があり、これを『福の神』と呼んでいた。しかし、何時しか礎石のことを『福の神』と呼ぶようになったものと推察する。

(長浜市教育委員会 伊藤 潔)

24. 中世の土壘検出と礎石の由来

長浜市榎木町 榎木 百坊遺跡

榎木百坊遺跡は、長浜市榎木町に所在する。古墳時代後半から中世にかけての寺院跡である。

今回の調査は、地蔵堂の建てかえおよび造成工事に伴い、128㎡を対象に実施した。調査地は、県教委の方で福の神古墳とされており、現地に行くと礎石が露出していた。当初から古代寺院跡の存在が考えられ、礎石があることから、基壇を設けている可能性が考えられた。

調査は、東西南北に3本のトレンチを設定し、人力による掘削を行った。遺構は、全く検出されず、西端で30～50cm程の石が大量に出土した。これが、中世の土壘である。遺物は、室町時代の土師皿、天目茶碗、陶器甕片が石と共に出土した。断面で検出した土壘の南側に露出した礎石がある。この礎石の周辺にもトレンチを設定し、掘削をすると下層部分に礎石を固定するように同じ大きさの石や遺物が出土した。このことから、この礎石は土壘を作るときに何処からか運んできて、土壘の一部に転用したものと考えられる。この土壘は、南北方向に延びており、榎木城跡の一部と考

25. 多数の鉄器と後期末の墳丘墓を確認

新旭町熊野本 熊野本遺跡

平成9年度から個人の別荘地建設工事に伴い発掘調査を実施している。

本年度は調査区9～19で調査を実施した。これまでの3000㎡におよぶ調査によって合計30棟の竪穴住居、柱穴、土壇、古墳などを検出した。これらの住居を確認した範囲から推測すると、東西約300m×南北200m（6ha）の範囲で集落が営まれていたと考えられる。調査区4・10・18地点では、中期末の直径12mにおよぶ円形住居を含む竪穴住居群が何度も建て替えられた状態で検出された。円形の中・大型住居と方形の中・小型住居がセットとなり、集落を形成している様子が確認された。

これらの中期末から後期初頭の竪穴住居やその周辺の包含層からは、27点におよぶ鉄器が出土した。鉄鍬・小型板状鉄斧・やり鉋などの鉄製品のほかに、鉄素材と考えられる鉄片も出土していて、鉄器の加工・製作が行われていた可能性が指摘されている。

調査区18では、後期末の墳丘墓を検出した。高地性集落の廃絶直後に首長墓が、その一角に築造されることが判明した。その規模は、東西12m、南北15mの長

方形と推定され、高さ約1.2m残存していた。墳丘の四方の裾部には人頭大の川原石が積まれていたと推測できた。墳丘の中央からは、東西5m・南北2mの方形の主体部を検出した。その中央には、組合式の木棺跡(2.6m×0.7m)が確認された。その頭部付近からは水銀朱が確認されたほか、741個に及ぶガラス小玉が出土した。墳丘墓が検出された地点は、台地の先端部にあたり琵琶湖を一望でき、古墳時代前夜の首長層の胎動を示すものである。墳丘の北裾部からは、水銀朱を加工した道具とみられるL字状石杵が出土していて、墳丘墓において行われた葬送祭祀のあり方を推測できる資料といえる。

(新旭町教育委員会 横井川博之)



調査区18(墳丘墓)全景 東から

26. 古墳・6世紀中頃の竪穴住居のカマド周辺より多数の土器出土 新旭町旭 堀川遺跡

堀川遺跡は、安曇川によって形成された沖積平野に立地する。標高は約92mである。新旭町大字北畑、大字旭の範囲に広がる。主に古墳時代後期の集落と平安時代末期の集落遺跡である。

今回の調査地から、竪穴住居2棟、溝数条、ピット等を検出した。住居出土遺物から、6世紀中頃のもので、その前後関係は、SH-1がSH-2より新しいものと考えられる。

SH-1のカマド内からは、須恵器杯身2個体が、かさなり伏せた状態で出土した。またカマドに近接して、須恵器杯身5、杯蓋4、土師器の甕3も出土している。

SH-2は、一辺4.8~5.2mで、高床部をもつ。高床部は、その形と位置、土器の出土状況から物置きであったものと考えられる。カマドは、土層の観察から、床面より一段低い焚口部、それよりもう一段低い燃焼部が明らかになった。支脚・煙道は確認できなかった。東・西・南に壁溝が巡り、深さ約20cmであった。カマ

下の燃焼部内より、土師器甕3、その西側より甕1、把手付鍋1、その東側より、須恵器杯身2、杯蓋1、焚口部より、多量の炭が出土している。



SH-2 カマド周辺土器検出状況

このような住居内カマド周辺からの土器の多量な出土は、住居廃棄時の状況を考えるうえでの好資料といえる。また検出した住居は、これまでの周辺の調査結果から、同遺跡内の同時期の集落の西端に位置するものと考えられる。今後、これまでに検出された住居の総合的な比較検討が必要である。

(新旭町教育委員会 山村義明)

平成10年度に滋賀県内で行われた発掘調査は、県・市町村教委併せて約200件である。これらは多くの方々の御理解と協力を得て実施されたものである。

県埋文センター研究会は今回で第74回目を迎え、年度末の研究会は調査担当者がスライドを使い発表しており、一年の締めくくりとして定着している。

今回26件の発表の要旨についてまとめていただいた。

幾つかをみると、下鈎遺跡出土の小銅鐸は現在知られる最小例であり、現在日本最大の銅鐸は大岩山から出土しており、距離を隔てない地域からの大小銅鐸の出土は、銅鐸の使い方に興味もたれる。湖南平野から検出される巨大な弥生集落の事例は滋賀県における弥生時代の社会構造を明らかにするものとして注目される。

近年の傾向として中世の調査成果が上げられる。長浜市の町並みや鎌刃城跡の調査ではその構造が明らかにされ、上平寺城下町遺跡では守護大名京極氏の館跡が調査され、館、山城、城下が古絵図どおりの地点に存在することが確認されている。

この他にも注目される調査は多いが、発表できなかったものも少なくはない。調査成果は地域の歴史文化を明らかにするものであり、これらを含め文化財関係機関ではあらゆる機会をとらえ、できるだけ早く、多くの方々にお伝えすることを心がけている。